

いはれて、酒に剛臆の座をわかてば、おのづからむ人のかたにかすまへられて、南郭が竽をふきけるほども、思へば四十の年にもちかし、されば衆人みな酒臭しと、世に鼻覆ひたる心はしらず、まして五十にして非を知りしとか、かしこきためしにはたぐひも似ず、近き比いたまし酒のあたりけるまゝに藻にすむ虫と思ひたつ事ありて、試に一月の飲をたてば、身はなら柴の木下戸となりて、花のあした月の夕べ、かくてもあらわれるものをと、はじめて夢のさめし心ぞする、けふより春の蝶の醉心をわすれ、秋のもみぢも茶の下にたきて、長く下戸の樂に老を待べし、さもあれ此誓ひ、みたらし川に御祓もせねば、たとへば仙の一座なりともまねがば、柳の青眼に交り、吸物さかなは人よりもあらして、おなじ醉郷にあそぶべくは、いさ松の尾の山がらすも、月にはもとのうかれ仲まと思ふべし。

花あらば花の留守せん下戸ひとり、

〔神道名目類聚抄四
神祇〕酒造祖神

酒解神 大山祇神 酒解子神ハ神吾鹿葦津姫又ハ木花開

按ニ酒店ノ輩、松尾神社ヲ以酒ノ守護トス、イマダ其由ヲ知ラズ、酒解神酒解子ノ神ハ、梅宮ノ神ナリ、蓋酒家ノ輩、梅宮ト松尾トヲ思過ルカ、

〔見た京物語〕松の尾の神は、酒屋ことの外に祈る、

○按ズルニ、造酒神ノ事ハ、尙ホ神祇部神祇總載篇ニ在リ、

〔延喜式四十
酒〕諸節會料酒

正月元日一斛八斗、七日三石四斗、十六日二斛三斗、十七日一斛四斗、五月五日一斛八斗、相撲節一斛八斗、九月九日一斛六斗、十一月新嘗會四斗、若可過此限聽辨官處分、

供奉神事諸司給酒法

親王已下三位已上二升、四位五位一升、六位已下五合、五位已上命婦一升、六位已下女孺并御巫五